

ジャグパル

JugPal

2001年9月1日 第13号



トピック

松浦昭洋さんがJJA(International Jugglers' Association)チャンピオンシップの本選出場という快挙を成し遂げました！！

帰国直後のあわただしい中、報告記をまとめ上げていただきましたので、読後の興奮の余韻がまだ残っている中、皆さんにもこの高揚感をお届けします。

報告記の中でステージに立つ「松浦さん」は、将来の「あなた」かもしれません。

[安部]

【JJAチャンピオンシップ挑戦記】

はじめに

国際ジャグリング協会(JJA)チャンピオンシップ、それは夢の舞台、映像の中の出来事、まさかその舞台に立つことになるとは、会社勤めをしていた数年前には思いもよらないことでした。

仕事の合間にお手玉をするのを最高の楽しみとするジャグラーの一人でしたから。しかし同時に、その頃の生活は公私とも順調とは言えず、たるんだ日々、たるんだ自分に嫌気がさしていた頃でもありました。もっと自分らしく生きたい、好きなことに精一杯打ち込みたい、そんな気持ちがどんどん強くなっていきました。

そしてその思いが募ってついに会社を辞め、大学に通いながらジャグリングにも真剣に取り組むようになりました。すると不思議なことに、自分が待ち焦がれていたような瞬間が訪れるようになったのです！

今回のJJA挑戦は、そのような生活の中で生まれたアイデアが思わぬ成長をとげ、新しいジャグリングとして実を結んだことから現実のものとなりました。

ステージを終えるまでは興奮、感動、悩み、アクシデント、涙？などが怒涛のように押し寄せてきた日々だったので、皆さんにも興味を持って頂けるのではと思っています。

また、これからチャンピオンシップに挑戦する人達の参考になればとも思います。

たかがジャグリング、されどジャグリング、チャンピオンシップに挑戦したジャグラーの奮闘記にどうぞお付き合い下さい。



1. 球体ジャグリング"Sphere"完成秘話

「ボールを縦に回したらどうなるんだろう？」そんな疑問がふと湧いてきたことが、全ての始まりでした。

2000年春、京都で行われたジャグリングドーナツライブ2000直後、さぁこれから何をしようか、とぼんやり考えていた時に浮かんできた、今回のパフォーマンスのきっかけとなった言葉なのです。その意味をお話するにはさらに数ヶ月さかのぼらねばなりません。

ある時、知合いの家で1996年のJJAチャンピオンシップビデオを見る機会がありました。そこで、ジャグラーの間では有名なGreg Kennedyの"Hemisphere"というパフォーマンスを見ることになりました。

パフォーマンスが始まった瞬間、何だこれは！？と目を丸くしてしまいました。というのも、そこで行われていたことは、普通ジャグリングという言葉からイメージするものとはかけ離れたものだったからです。

詳しく説明します。Hemisphereには英語で「半球」という意味があります。演者は、透明の半球容器の中に複数のボールをぶつからないように流し込み、観客はそれを直接、または半球上部に置かれた鏡を通して見ることになります。

1996年のチャンピオンシップで、彼はその斬新なアイデアとほぼ完璧な演技で観客を魅了し、見事その年のチャンピオンに輝きました。ジャグリングとしてのユニークさ、ボールの動きの美しさ、パフォーマンスの(いい意味での)怪しさ、完成度などいろいろな面で素晴らしく、まだこんなことができたのか！と衝撃を受けました。

しかし、今考えてみると、何か気にかかるものもあったのだと思います。数ヶ月後にそれが上の疑問となって現れました。

半球によるジャグリングは、重力に任せてボールを半球の中に流し込むため、どこか静的な印象を与えます。もっと積極的に力を加えて回転させたら、ダイナミックな動きが作れるんじゃないか？単純にそう思ったわけです。

しかし、そのアイデアはその後思わぬ発展を見せ、僕をJJAへ連れていってくれることになりました。

最初にそのアイデアを試してみたのは、実は球ではなく、巨大な金魚鉢でした。金魚鉢を置いてある中国雑貨の店へ行き、店員の人に気を使いつつ、中にボールを入れて回してみました。

しかし、上に開いた穴から手を突っ込んでも力が入らず、ボールは勢いよく回ってくれません。面白くならないので、その日はがっかりして家に帰りました。

が、しばらくして、ふと形がいびつなことが問題だったなのかもしれないと気付きました。理想的な形にすれば・・・そうか球にすればいいんだ！！それはコロブスの卵のような瞬間でした。すぐに入手できるものとして金魚鉢を使ったのですが、形の問題として考えれば当たり前の結論に行き着いたわけです。

でも・・・そんな球どこにあるの？ また現実の問題に戻ってきました。とりあへず丸い照明器具を見つけましたが、小さすぎて何ができるのかよく分かりません。その頃は、街で大きな丸い街灯を見る度に、持ち帰りたい衝動に駆られていました。

そんなある日、街に出ていた時のこと、雑貨屋でついに巨大な球体と遭遇することになります。最初のアイデアから数週間後のことでした。

その時はもう興奮して、店員の人が怪訝な顔をしているのもおかまいなしに、中にボールを入れてゆらゆら転がして遊びました。まだこれという感触はありませんでしたが、探しに探していた球でしたから、まあおもちゃになってもええかくらいの気持ちで、大枚はたいて買って帰りました。

しかし、その日は実際、これまでの人生の中で最も衝撃的な記念すべき日となったのです。家に持ち帰って早速球を取り出し、今度は穴を真横に向けて固定して、ボールを思い切り回してみました。すると信じられない光景が目の前に現れました。

なんと、ボールがいつまでも回り続けたのです！

最初に力を加えただけで、最高15回転以上回り続けました。それは、これまで経験したことがないほど強烈なインパクトを持つ光景でした。

自分の推測や常識をはるかに上回っている。後で考えてみれば摩擦係数などの言葉で説明できるので、決してマジックではありません。でも何より重要なことは、自分にそれだけの衝撃を与えたという事実です。

これは面白いものになる！

そう直感しました。単純に回すだけでも十分面白い。じゃあ、もう一歩進んで、たくさんのボールを同時に扱えないだろうか？ 自分の中のジャグラーの虫が騒ぎ始めました。

両手をどう穴に入れるか、ボールをどう回転させるかなどを試しているうちに色々なことが分かってきました。それらの殆どは、姿勢や筋力の問題ですぐにはできないものでした。

特にボールを5つ、6つと扱うことなど、試した瞬間笑ってしまうほどでした。でも、がっかりもしませんでした。だってジャグラーはそういう不可能が可能となることを知っているのですから！ どれくらい時間がかかるか分からないけれど、いつか必ずできる。

これまでに学んできたことを総動員する日がついに来た、と思いました。こうして球に専念する日々が始まりました。

2. 球体ジャグリングの修得

球に取り組み始めてすぐに、球の面白さ、可能性に自信を深めたので、目標をすばり翌年のJJAチャンピオンシップ優勝に決めました。球自体には抜群の魅力がある、あとは自分が活かしてやれば十分可能だと真剣に思っていました。

球によるジャグリングを発展させるに当たって、一つ気に留めたことがあります。

それはHemisphereとの関係です。球体によるジャグリングに行き着くまでには、想像を超える出来事がいくつもあったので、そのユニークさにはそれなりの自信を持っていましたが、球は半球を形として含んでいるので、そこに類似性があるのも事実です。

半球による技の一部は球を使っても可能ですし、実際それらは面白いのです！でも、それをするとGreg Kennedyのコピーになってしまいますし、球体ジャグリングの新しさが伝わらない心配もあります。

全く独自のものを作り上げたかったのです。そこで当初次の二つを心に誓いました。半球でできる技は一つも入れないこと、Greg Kennedyのパフォーマンスはルーチン完成まで見ないことです。

それからの数ヶ月は正に興奮の連続でした。毎日のように新鮮な驚きがあり、新たな技を見つけては修得していきました。

球によるジャグリングには、クラブのスピンの似た、ボールの回転数という概念があったり、ボールの軌跡がカスケード(奇数個のボールの基本技)とファウンテン(偶数個のボールによる基本技)で同じというユニークな特徴を持っていたりして、やればやるほどその魅力に取りつかれていきました。

練習の中ではパフォーマンスにまとめる準備もしていきました。

ルーチン作りでは、気に入った7分の曲に合わせて、それまで経験したことがないほど色々な可能性を考えました。

また、球を載せる台座をどうするかという球特有の問題もありました。

手間やお金の問題で二の足を踏んでいましたが、結局、日曜大工の店で金属製のフレームを買ってきて組み上げました。

それはとても美しいと呼べる代物ではありませんでしたが、台座第一号としては上々の出来でした。

いよいよパフォーマンスのできる環境が整ったわけです。

ルーチンのアイデアはその年の暮れにほぼ固まり、再びグレッグケネディのパフォーマンスを見るときが来ました。

祈るような気持ちで画面に向かったのを覚えています。

が幸いなことに、決めポーズ、動きにわずかに同じものがある他は、基本的に”かぶり”はないことが確認できました。

また、彼自身既に球を使っている可能性も考えて、ホームページでチェックしたりしましたが、彼のオリジナルジャグリングの中に球は含まれていませんでした。これでパフォーマンスを発表する気持ちが固まりました。

翌年に入っても、安定していない技やルーチンの練習に励み、いよいよ人前で披露する時が来ました。

2001年3月、大阪の”たのしまNight”というショーでのことです。パフォーマンスとして成立するか、お客さんに受け入れられるか不安と期待が入り交じる中での初披露となりました。そして反応は…期待以上のものでした。

まず、パフォーマーの人達が興味を示してくれ、すぐに面白さを分かってくれました。また、お客さんとの間でも不思議な感覚を味わいました。

本番のステージ上で、最初に球にスポットが当たった時、お客さんから”?!”という不思議なリアクションがあり、ボールが球の中で勢いよく回り始めた瞬間、これまで経験したことのない”おお”という声が上がりました。

パフォーマンス自体は余裕がなくてひどいものでしたが、パフォーマンスになるという実感を得たことは何よりの収穫でした。その翌月京都で行われたドーナツライブで前回とは違う演出方法を試したことで、課題と方向性がよりはっきり見えてきました。

ドーナツライブ後は、もうJJAに向かってまっすぐです。

今回JJAのパフォーマンスで一番アピールしたかったのは球によるジャグリングの新しさ、美しさで、それをエキゾチックな雰囲気ですべてサポートしたいと考えました。

IJAの舞台であることを考え、かつ自分が違和感なく演じられるものとして、音楽は日本、アジアのテイストの感じられるものの中から選び直しました。衣装は黒を基調に二種類準備しました。その頃には球の台座も作り直し、もう見違えるようなものになっていました。

ルーチンを固め直してからは、ひたすら技と演出の練習に励み、リハーサルを繰り返しては洗練させていきました。7月末のIJAまでの数ヶ月間は、本当にあっという間に過ぎていきました。

3. いざIJAフェスティバルへ

アメリカへ出発する際、一つ頭の痛い問題がありました。

それは道具の輸送の問題です。今回は球をはじめ、いくつか壊れやすい小道具を使い、重量も40kg以上あったので、それらを無事アメリカに送ることがパフォーマンス以前の大問題だったのです。

色々な手段を考えた末、機内持ち込みと宅急便を併用して、がちがちに梱包して持っていきました。向うで梱包を解いて、球が変わらぬ輝きを見せてくれた時の気持ち、想像してみてください！「ようやった！」と思わず球を抱きしめてしまいました。

幸運は他にもありました。今年のIJAフェスティバルは7月24日から28日までの日程で、ウィスコンシン州マディソン(シカゴのすぐ近く)で行われました。

そして、なんとフェスティバルの会場から車で10分の所に大学時代の友人が一家で住んでいたのです！ そのおかげでチャンピオンシップ一週間前に現地入りして自宅で世話になり、練習に専念することができました。これには偶然と友人の好意が後押ししてくれていると感じ、がぜん燃えるものがありました。

7月24日、いよいよ2001年IJAフェスティバルが始まりました。現地で合流したドーナツの末吉正和君、近大の上田寛君と会場入り。

四年前に一度参加しているので、フェスティバルの雰囲気は知っていますが、会場を埋める数百人のジャグラーはやはり圧巻です。末吉君、上田君も早速興奮を隠し切れないようでした。

やはりIJAフェスティバルは、我々ジャグラーの心を最高に熱くしてくれるお祭りです。

4. チャンピオンシップ予選

初日の昼頃にチャンピオンシップ申し込みのデスクがあき、昼過ぎに行くと既に8人がエントリーしていました。僕もその場で申し込みを済ませました。

がその直後、予選は基本的に申し込み順に行うと言われました。もっと後にすればよかったと思っていると、次にやってきたのがJason Garfield、最近金メダル、銀メダルを立て続けに取っている注目のジャグラーです。申込用紙の出身地に「チベット(なんか文句あるか?)」などと書くあたりはさすが余裕です。

その時、ふと予選の順番はJasonの後の方がメリハリが利いて面白いかもしれない、受付の人に頼ってみました。気軽に応じてくれたのですが、これは余計なことでした。

というのは、夜中に発表された予選の順番で、Jasonは何故か最後尾、自分はなんと二番手、それも午前中に早められていたのです。何が起こるか本当に分かりません。パフォーマンスのセッティングに時間がかかり早い順番は避けたかったため、これにはショックを受けました。でも、決まったものはしょうがありません。すぐに心をきりかえました。

予選前夜は興奮もあって、あまり寝ることができませんでした。でも、予選が午前中なら集中力が切れることはない、と思うとあまり気になりませんでした。

早朝5時に起きだして、2時間ほど最後の練習。これが最後だと思うと本当に気合が入り、集中した練習ができました。最後2回の通し練習では、ミスは1回、0回とほぼ完璧の状態に仕上げることができ、よい！ける！と自信を強めました。

チャンピオンシップ個人の予選には17人が参加したようです。予選は本番と同じステージを使い、審査員3人が見つめる中で行われました。審査員は、Bob Nickerson、Jack Kalvanともう1人。予選ディレクターに個人、チームで金メダルを取っているBenji Hill、アシスタントに1999年金のAdam Kariotisがつくという豪華ぶり。

他の予選エントリー者は、Sean Mackinney、Jay Gilligan、Matt Henry、Luke Jay、Reid Belstock(、Jason Garfield)と過去のメダリストが名を連ね、さらにJeffrey Daymont、Scott Sorensen、Dr. Stardust、Otto Man、Sam Hartford、Nicholas Souren、Mat Hallなど、著名なジャグラーが集いました。

日本からは僕と上田君がエントリーしました。今回予選通過者は5、6名という話も聞き、これは自分のパフォーマンスをやりきらないと厳しいと覚悟しました。

スタッフ、審査員、演者しかいないガランとした会場で、いよいよ予選スタート。一番手はDr. Stardust。舞台そでから見ていると、1995年ピープル CHOICE 賞を取った時と似たルーチンをやっていました。

そしてすぐに自分の出番。予選はミスが命取りなので、落ち着いてミスをしないことを心がけようと思いました。ステージに道具のセッティングを行い、照明のチェックを簡単にした後、パフォーマンス開始。

しかし始まった直後、大きなミスを犯したことに気付きました。真上からのスポットがなく、やむをえず前方の照明を使ったのですが、球表面のよく目をやる部分に、前方からの照明が見事に一列に並んでいたのです！まるでこちらに微笑んでいるかのように・・・笑い事ではありませんでしたが、もう後には引けません。

とにかく集中することを心がけました。その照明のせい、か、序盤考えられないところで何度かミスしてしまい、もうミスは許されないという状態になってしまいました。でも、不思議と精神的に乱れることはなく、客席をしっかりと意識してパフォーマンスができたように思います。

演技終了。結局ミスは五か所くらいでありました。途中から持ち直したのとエンディングがピタッと決まって審査員から拍手がもらえたのが救いでしたが、これでは当確とは言えず、予選通過はきわどいと思いました。

一発勝負、ミスの許されないステージというのは、なんと酷なところなんでしょう。でも、このまま終わったのではあまりに悔しすぎる、もう一度チャンスをくれ！と心の中で叫んでいました。放心状態でいるとBenji Hillがやって来て、一言ベリーナイス！と言って去っていきました。

自分の演技の後ステージを見ていると、Nicholas Souren、Matt Henryが強烈なナンバーズ系のパフォーマンスを見せていました。しかもミスが少ない。周囲の人達と、この二人は固そうやね、と話しました。

特にMatt Henryは、ほんとにこれがあのMatt Henry?!と思うほど、1997年に銅メダルを取った時とはイメージチェンジして、むきむきのパワージャグラーとなっていてびっくりしました。

他に、昨年のジャパンジャグリングフェスティバルにゲストで来てくれたSean Mackinneyと予選後言葉を交わすと、予選は問題ないとクールに言い切っていました。きっちりパフォーマンスを決めてきたようです。

5. 予選通過！ 本選へ

予選後は本選に残ることを想定して、ホテルに戻って仮眠をとりました。予選通過者の発表はその日の夕方6時。それに合わせて、もう一度会場へ向かいました。

ホテルから会場への道上で上田君とばったり出くわし、聞くと、なんと僕が予選通過していたとのこと。聞いた瞬間思わず「うおーっ！」と叫んでしまいました。

希望は持っていましたが、まさか自分がという思いもありました。足早に体育館に行って、自分の目で確認。その場で知り合い達とも会い、がっちり握手を交わしました。

もう一度チャンスをもらえた。今度こそ最高のパフォーマンスをしよう！再び気力が充実してきました。早速ホテルに戻って、変更することにした演出の準備と最後の練習に残りのわずかな時間を使いました。

予選通過のニュースは、日本の仲間が掲示板に載せてくれたりしましたが、他にも思わぬところで流れていました。

マディソンに住む友人が、現地の日本人コミュニティーのメーリングリストに流していたのです！日本人がチャンピオンシップに出場するので応援に行きましょう、というメッセージとともに。何人の人が来たのか結局確認できませんでしたが、友人の出来るだけ後押ししようという気持ちは本当に励みになりました。

チャンピオンシップ当日は、熟睡して気持ちよく迎えることができました。

午前中から1人15分の持ち時間でリハーサルが次々と行われていきます。

予選で痛い思いをしたので、今回は希望の照明を伝えようと気合を入れて臨みました。

その際重要だったのがアシスタント末吉君の存在でした。

リハーサルは15分間で道具のセッティング、照明、音響などの打ち合わせを終え、(可能なら)通しのパフォーマンスを行うのですが、もし彼に客席側から照明の具合を伝えてもらえなかったら、全てをやりきるのは無理だったと思っています。彼のサポートのおかげで照明は演じる側からも客席側からも最高のものとなりました。

個人部門のファイナル出場者は7名。出演順に Jeffrey Daymont、Matt Henry、松浦、Sean Mackinney、Ivan Percel、Nicholas Souren、Reid Belstock、(”おまけ”としてJason)

開演までに一度ホテルに帰って休み、再び会場に戻ってきました。

夜7時、いよいよチャンピオンシップ開始。ステージを見ると、なんと司会席にはJasonの姿が！チャンピオンシップのリストにJasonの名前があったのは彼一流のジョークで、実は司会者としての参加だったのです！

パフォーマーは自分の順番の30分前までは、どこで練習していても構わないので、舞台裏は終始ガラッとしていました。

僕は道具が大きいので、ずっと舞台裏で準備していました。

(暗転中は裏も真っ暗になってしまうので、かなりきついものがありました)

チャンピオンシップはジュニア部門からの開始です。

今年のジュニアは豊作のようで、開始当初からかなりの盛り上がりになりました。薄暗い中、1,000人近いお客さんから会場が震えるほどの拍手と歓声がかかるのが聞こえてきて、これがチャンピオンシップなんだ、とぐっと来るものがありました。泣いても笑っても本当にこれが最後、堂々と演技をしよう、それだけを考えていました。

直前のチーム、Rasing Cainの演技が終わり、いよいよ出番。

ステージ上の道具のセッティングも予定通り完了して、暗闇の中ステージ中央に立ちました。この時、また全く予期せぬ出来事が起こりました。

ステージには、片手に大きなアクリルボールをのせ、顔を伏せた状態でスタンバイしたのですが、いくら待っても司会のJasonの話が終わらず、パフォーマンスを始めることができないのです。

あとで聞いたら、2分以上その状態が続いたようです。顔を上げるに上げられず手もだるくなってきて、もう少し長ければ、どうなっていたか分かりませんでした。

今思い出しても冷や汗が出てきます。

自分の名前が紹介されるまで、司会者の様子をしっかりと注意おく、というのは次に出場する人にも伝えたい教訓です。

パフォーマンスが始まりました。照明などのセッティングが完璧だったので、序盤から自信を持って演じることができました。海外でのパフォーマンスは今回が初めてで、どういふ雰囲気になるのか分かりませんでしたし、おそらくお客さんも一体何が始まるんだ？という気持ちだったと思います。

序盤はお客さんから予想外の小さな笑い声やリアクションがありました。(うまく説明できないのですが)でも、見せ場の部分で大きな拍手、歓声起きて盛り上がっているのが分かり、終盤に向かってのノッていくことができました。

記憶では、終盤まで大きなミスはなく、アピールしたかったものかなりを出すことができました。(反省は多々ありますが)エンディングでは、曲に合わせてボールを取りきってピタッと終わらせることができず、自分の中では決まったという感覚があっただけに悔しい思いをしました。

締めを決めるというのは本当に大事なことです。パフォーマンス全体としては、良い緊張感と気合の中で終始演じることができ、そのとき自分にできる演技としては、最高に近いものだったと思います。詳しくは、近々発売されるチャンピオンシップビデオで見て頂けたらと思います。

自分の演技が終わった後は客席側に行って、他のパフォーマンスを見ていました。でも、テンションがもうすっかり下がってしまっていて、ただぼーっと眺めていただけでした。

今年のチャンピオンシップは司会のJasonの話が長かったらしく、なんと五時間近くの長丁場となりました。

結果発表は深夜零時近くになって。個人部門の金メダルはMatt Henry、銀はNicholas Souren、銅はJeffrey Daymont。心の片隅で少し期待もあったので、正直ガクッときました。ああ評価されなかったのかなあ、と。

ジャグリングパフォーマンスという非常に広い枠の中で競い合うのは、審査の難しさを考えると辛い面もあります。球を完全に生かしてやれなかったという無念さもありました。

チャンピオンシップ終了後は、パフォーマー、関係者入り交じってねぎらい合い、パフォーマーとして参加できた幸せに浸ることもできました。日本人の人達とも再会し、体育館に戻ると、深夜零時を超えているにも関わらず、人でごった返して熱気むんむん。

それからレネゲードショーもあり、ジャグラーの一日はまだまだ終わりそうもありません。ただ自分はもう抜け殻のような状態になっていて、そのままホテルに戻り、眠りにつきました。

6. チャンピオンシップ後

チャンピオンシップ後の二日間は、Jay GilliganやJohn Heldのワンマンショーやカスケード・オブ・スターズ(オールスターキャストのステージショー)など、ようやくリラックスして楽しめました。体育館では、驚くほどたくさんの人から声をかけてもらい、パフォーマンスは名刺代わりだなとつくづく感じました。

また、皆から良かった、面白かったといった感想を聞くうちに、賞は取れなかったけど、大舞台で自分のパフォーマンスができて皆に楽しんでもらえた、それで十分じゃないか、とも思えるようになってきました。

今回のJJA行きで、僕には一人どうしても話しておきたい人がいました。Greg Kennedyです。最初に書いたように、彼は今回の芸で最初にインスピレーションを与えてくれた人なので、彼がパフォーマンスを見てどう感じたかはとても重要なことだったので。

そして最終日、ついに彼と話すチャンスがきました。体育館で練習しているのを見つけたので話しかけてみました。彼は顔を見るなり分かってくれたようでした。そしてものすごい早口で、面白かった、パフォーマンスを楽しんだよと感想を言ってくれました。

その瞬間、僕は自分の心配が杞憂に終わったことを理解しました。さらに賞を取れなかったのは残念だと言ってくれて、一つの独立したパフォーマンスとして認めてくれていると感じることができました。もう何の心配もなく自分の道を進んでいけばいいんだ。それが分かっただけでも、今回JJAに来てよかったと思えました。

7. これから

二年前、僕は自分の求めているものがそこにはないと感じ、会社を飛び出しました。結局自分が求めていたのは、とびきり心を熱くする瞬間や真正面から取り組める何かだったような気がします。

そのような気持ちは空回りすることもしばしばでしたが、今回の挑戦を通じて、ジャグリング、そしてパフォーマンスの世界はそういう自分をしっかり受け止めてくれるものの一つだという思いを一層強く持つことができました。

今回の結果はたいへん嬉しいのですが、パフォーマーとして磨きたいことはほんと多いです、自分の可能性に挑戦する意味でも全く変わりはないので、これからも自分の心に響くものを形にし、自分らしいパフォーマンスをしていきたいと思っています。

ちょうど今日はジャグリングの黎明期、盛り上がりの胎動が感じられる、またとない時期にきています。ジャグリングが世の中に広く認知され、パフォーマンスアートとして、他のジャンルの表現と刺激し合いながら自由に飛翔していく姿を夢見てやみません。

8. 謝辞

今回報告記を書くにあたって、このような機会を与えて下さった安部さんに深く感謝いたします。また、今回のパフォーマンスを行うまでには、本当に多くの方々の協力がありました。衣装を作ってくれた中小路さんファミリー、台座を作ってくれた中村君ファミリー、アメリカでお世話になった京君ファミリー、お互い切磋琢磨している京都大道芸倶楽部ジャグリングドーナツの面々、アメリカでお世話になった末吉君、繁岡君、上田君。他にもたくさんの方々の頭の下がるような協力やアドバイスがあって、今回のチャンピオンシップ挑戦が可能となりました。ここに深く感謝します。どうもありがとう。そして、これからもよろしく！

[松浦 昭洋 <QYK06757@nifty.ne.jp>]



東洋医学から見るジャグリングのすすめ

【東洋医学からみるジャグリングのすすめ(第四回)】

私が毎日患者さんの治療をしていて、しみじみ思う事があります。

それは、折角歪んだ骨格を真っ直ぐに治しても、患者さん本人が歪むような動作を繰り返し行っていれば、また歪んでくるということです。

それを防ぐには、定期的に治療を受けるか、自分自身が歪みを作る動作を止めてバランスの取れた動在を心がけるしかありません。

しかし、一般の方は右利き左利きがあり、利き手で何でも用事をこなします。

また、テニスやゴルフなどが趣味の場合は、日常生活動作以外でも利き手、利き足腰の回旋等により、左右で1.5~2倍もの筋力差が生じ、強烈な歪みを作り出し、背骨が蛇のように曲がり、重度の側湾症になる方さえいらっしゃいます。

ですから、ジャグリングの初心者は左右両方で同じ技が出来るようになってから次の技に入りましょう。

私のサークルでも上手な方は「左は右の3倍練習しろ」、「日常生活でも左を意識して使え」などのアドバイスをしています(右利きの場合)。

また、治療にいらっしゃる患者さんも両利きの方は歪みが少なく、軽症の方が多いのです。

ですからあなたがもしも得意な方だけ練習しているなら要注意です。

体のバランスを考えるなら不得意な方を多く練習した方がよいのです。

そして柔軟体操も左右対称になる様に、堅い方をよりほぐしましょう。

~ 力点・その2 ~

ボールジャグリングでは、手の左右のバランスが問題ない中級者の方々は上下のバランスを意識し始めます。

いくら左右のバランスが良くても、上半身で演じている限り柔らかさや美しさを表現しづらいですし、安定感や安心感など、見ている側がなんとなく感じる雰囲気は、ボールの動きよりも下半身がどのように使われているか、下半身から発生した力がどのように上半身に伝わっているのか、により変わってきます。

前回で「剣玉」を例に下半身の重要性について触れました。

簡単にまとめると、

「上半身は、より繊細な動作をするために感覚性伝導路をフルに発揮できる状態にしなければならず、そのためには力を入れてボールを投げ上げるという運動性の伝導路を使う動作は下半身で行った方が良い」という事です。

そうなんです。実は下半身を鍛える事こそが上半身を柔軟にし、美しく見せる近道なのです。

鍛えると言っても、筋トレをして筋力をつければ良いか?と言うと、ちょっと違います。

あくまでも上半身と下半身のバランスを保つような鍛え方でなければなりません。

そのためには、

- 1.正しい姿勢(骨格)
- 2.脱力(感覚性優位になる様な意識)
- 3.正しい姿勢で脱力された体を支えられる下半身
- 4.上半身と下半身を連動して使うための腰の柔軟性

などの注意が最低限必要で、他の芸事でも、体作りの稽古メニューに必ずと言って良いほど含まれているものです。

ジャグリングは一見、手で行うもののように見えます。しかし手は道具との接触点にしかすぎず、全身が連動した動きの結果として道具に力が伝わるという意識を持たなければ、美しく力みのない、健康にも良いジャグリングを行う事は難しいでしょう。

§ 次回予告 §

一般に「私、コリ症で何をやってもすぐ肩がこるんです」と言われる方のほとんどは、力点が首や肩の周辺で、全ての動作が、足や腰、背中といった部分をほとんど使っておられません。

ちょうど皆さんがボールジャグリングを初めてされた時、どうしても手投げになってしまい、どんどんボールを投げ上げる位置が高くなってしまった時のような動作の仕方をされている訳です。

このような方達は、日常の生活動作でも首・肩周辺をメインに筋を緊張させて動くクセが染みついているから、それを止めさせ、力を下半身から出すように指導すると、「こんな楽な動き方があったなんて、今まで大分損をしていたんですね」と言われ、驚かれます。

今回は、首・肩についてです。

「コリ症」の方がジャグリングに出会っても、すぐ「自分には向かない」と言ってやめてしまうのは勿体無いですよ。

[MOMONTA]



ジャグリングと私

【福地俊夫さんの場合】

私がジャグリングを始めたのはハンガリーに住んでいた時のことだ。

正確には「私」というよりも「私たち」と言ったほうがいいだろう。なぜなら、当時恋人、現在の妻（ハンガリー人）とともにジャグリングを始めたからだ。

私はなぜジャグリングを始めたか。

実はジャグリングを始める前段階として、ハンガリーでのけん玉紹介があった。

青年海外協力隊員としてハンガリーの大学で日本語を教えながら、日本文化の一つとしてけん玉を紹介する機会が多かった。

子どもの時かなり練習していたので、それなりに上手だった。

ハンガリーの子どもにしてみると、エキゾチック・ジャパンから日本の伝統的な遊びの名人がきたという感じで、真剣に見てくれて、また驚いてくれた。私も調子に乗って、ハンガリーに行ってからずいぶん練習をして、腕を磨いた。

ハンガリーの首都であるブダペスト以外でも、様々な地方でけん玉を紹介した。

もともと私はいわゆる「目立ちたがり屋」で、子どもの時は人前に出て注目を浴びるのが好きだった。ハンガリーでけん玉を紹介しているうちに、その「目立ち精神」が徐々に復活してきた。

恋人とパリへ旅行に行ったときのことである。

小さな広場でジャグラーたちが練習していた。何人かの人たちがクラブの練習をしていた。私はこれだと思った。これでまた人を驚かすことができる、目立つことができると考えた。

すぐにそこにいるジャグラーたちにそのクラブはどこで売っているのか聞いた。そしたら、近くのおもちゃ屋さんを教えてくれて、クラブ4本と説明ビデオを買った。

ブダペストにもどって、すぐにビデオを見て練習を始めた。そして、恋人と2人で毎日何時間も練習した。もうよく覚えていないが、2週間ぐらいでなんとか3本で100回投げ上げることができるようになった。

この時は本当に嬉しかった。

その後、ビデオを見ながら様々なテクニックを練習したが、どれも中途半端でものにならなかった。

というか恋人と2人でするパッシングを覚えて、その魅力にとりつかれたのだ。最初は4本のクラブしか買わなかったのに、パッシングを実際にできなかったし、どんなものかよくわからなかった。

でも、ブダペストのサーカス学校で教えてもらうようになり、パッシングの面白さが分かってきた（4本でも1人のパスの練習はできる）。

やはり、誰かに教えてもらったほうがいいと考えて、ブダペストのサーカスに相談に行ったら、個人的に教えてくれることになったのだ。そこでパッシングの基礎を教えてくれた。

そして、クラブを2本追加で買って、6本で本格的にパッシングができるようになった。

日本で大活躍中のピーター・フランケル氏を教えたというカールマン・パラージュ氏にも教わった。

彼は世界中でサーカスの一員としてジャグリングを披露した経験をもつ人で、人間的にも素晴らしい人だった。

札幌でサーカス公演をしたことがあり、しきりに日本を懐しがっていた。私たちは最初はクラブから入ったのだが、カールマン氏にはボールのテクニックも教えてもらった。

ハンガリーにいる時はジャグリングを見せる機会はほとんどなかったが、日本に帰ってきてからは、いろいろなところで見せる機会が増えた。半分ボランティア、半分仕事の感じで紹介している。

私たちのちょっとしたルーティンは、私一人でする風船、ボール、けん玉、そして妻と2人のパッシングである。

幼稚園、小学校、老人ホーム、企業の祭などで、ときどき披露している。技術的にはまだまだ未熟だが、夫婦2人の趣味・仕事として、楽しみながらやっている。

[福地俊夫 <fuku@aaa.email.ne.jp>

<http://www.asahi-net.or.jp/~yh8t-flkc/gy/>]



サークル紹介

このコーナーでは、全国各地のジャグリング・サークルを順次紹介していきます。

今回は『周南(しゅうなん)ジャグリングクラブ』の紹介です。

また日本ジャグリング協会のジャグリングクラブ紹介のページ<<http://www.juggling.gr.jp/>>にも国内の多くのクラブが紹介されています。

周南ジャグリングクラブ…本号
 横浜大道芸倶楽部 YDC (神奈川)…12号
 <<http://www.01.246.ne.jp/yuji-k/>>
 ジャグチュー (北海道)…11号
 <<http://page.freett.com/sjc/>>
 大津ジャグリングクラブ (滋賀)…10号
 <<http://www.biwa.ne.jp/torisan/frjuggling.htm>>
 ジャグリングクラブ tossLife (東京都)…9号
 <<http://www1.linkclub.or.jp/swing9th/tossLife/>>
 大阪大学ジャグリングサークル Patio (大阪)…8号
 <<http://patio.wo.to/>>
 京都大道芸倶楽部 Juggling Donuts (京都)…7号
 <<http://juggling-donuts.org>>
 福岡ジャグリングクラブ FJC (福岡)…6号
 <<http://zodiac30.cse.kyutech.ac.jp/ooshige/Juggling/>>
 筑波大学附属駒場中学・高等学校ジャグリング同好会
 筑駒Jugglers (東京)…5号
 <<http://www.geocities.co.jp/Berkeley/1242/>>
 所沢ジャグリングクラブ JUGFLY (埼玉)…4号
 <http://www2c.aimet.ne.jp/ichiro_t/juggling/jugfly/>
 綾瀬ジャグラーズミーティング JAM (神奈川)…3号
 <<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Sumire/9108/>>
 ジャグリングクラブ マラバリスタ (東京)…2号
 <<http://www.malabaristas.com>>
 ジャグリングサークル JUG (大阪)…1号
 北里大学獣医畜産学部ジャグリングクラブ (青森)
 <<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Labo/5397/>>
 ホゴノプロフィス (仙台)
 <<http://member.nifty.ne.jp/HOGONOPRO/>>
 ジャグリング友の会 (東京)
 <<http://home2.highway.ne.jp/sinzirou/>>
 立教大学パフォーマンスサークル どりいむ・ぼっくす (東京)

<<http://www.rikkyo.ne.jp/00ia007t/doribo.htm>>
 小平ジャグリング倶楽部 (東京)
 <<http://www.mailhost.net/masaki/kjc/>>
 ジャグリングクラブ まめぞう (東京)
 <<http://mamezou99.tripod.co.jp/index.html>>
 東京工業大学ジャグてっく (東京)
 <<http://www4.nasuinfo.or.jp/shu/index.shtml>>
 電気通信大学ジャグリングサークル "Le Passage"
 <<http://members.jcom.home.ne.jp/junkoma/p-index.htm>>
 市原ジャグリングサークル JugJug (千葉)
 <<http://www3.plala.or.jp/jugjug/>>
 千葉大ジャグリングサークル ポッサム
 <<http://www.sakurasoft.co.jp/possum/>>
 千葉東高校ジャグリング同好会
 <<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Cafe/9745/>>
 静岡大道芸サークル WAPS (静岡)
 <<http://www.tomi103.com/waps/>>
 New Japan Juggling Club (愛知)
 <<http://www.katch.ne.jp/mine/jug/>>
 春日井ジャグリングクラブ (愛知)
 <<http://www.tcp-ip.or.jp/n01/kjc/>>
 NJC (名古屋ジャグリング倶楽部)
 <<http://njc.xtaro.com/>>
 金沢大学ジャグリング&マジックサークルJMC
 <<http://jump.uic.to/uen0/>>
 福井ジャグリングチーム FJT (福井)
 <<http://bishop.fuis.fukui-u.ac.jp/nishio/ft/>>
 四国ジャグリングクラブ (新居浜)
 <<http://powers.gr.jp/four-live/>>
 九州良児技団 (北九州)
 <<http://www.iris.dti.ne.jp/ritsue/>>
 九州工業大学 ピルエット
 <<http://pirouette.club.kyutech.ac.jp/>>
 西南学院大学ジャグリングサークル(福岡)
 <<http://members5.tsukaeru.net/s.g.u.j.c/>>

【周南ジャグリングクラブ】

徳山冬のツリーまつり(12月)は徳山市(山口県)駅前ロータリーを中心に開催される。
 その主管を徳山商工会議所青年部が担当して今年で10年目を迎える。

3年前 イベントのマンネリ化、経費削減が言われる中、ある会員が酔った席で「市民一芸・得意芸パフォーマンスを各会場で開催していて、プロではなく、自分たち(主催者、参加者)が楽しむイベントがいっぱい…」と案が出た。
 その頃から ジャグリングがテレビでも盛んに取上げられていた。

これがスタートでした。



運良く 2000年 徳山市が市制施行65周年と言うことで、審査等があるが「市民活動団体に50万円を補助する」との事。

これとばかりに一般市民等に声をかけ、道具を揃えはじめた。

2000年3月「イベントに出向いて盛り上げのお手伝いをしますよ!! (ジャグリングのワークショップ形式で皆で遊ばせよう、楽しませよう。)」をコンセプトに「イベントお助けパフォーマンス隊」として早速スタート、但し補助金の関係上、徳山市内での活動に限定されましたが。

練習するまもなく各イベントからお声がかかり、恥をかきかきステージに立つこと数回、秋頃には1日2会場から依頼があり、10月だけでも計8会場、数をこなすうちになんとか慣れてきました。

そうこうするうちに「福祉施設にも学校にも徳山市外にも」の声が多くなった。

結局 2000年度 会員数20名 出場会場30会場 最後の締めくりに12月のツリーまつりに参上、なんとか人垣が6重になるまでの観客「やればできるじゃ〜ん」の声と共にビールで乾杯。

福祉面にも、学校関係各所にも、徳山市外にも、ジャグリングをもっと全面に...の意味を込めて「周南ジャグリングクラブ」に名称変更。

2001年3月 山口県の県ヤングパワー発揮支援事業の一環として「ジャグリングフェスタ2001」をザ・モール周南にて開催、日本ジャグリング協会 中嶋氏のご協力の元 参加者、見学者1500名の大盛況にて終了し、これを周南ジャグリングクラブとしての再スタートとしました。

まだまだ ジャグリングを見てもらうと言うより、まずは自分たちで楽しみ、一緒に遊ばせよう。というレベルですが皆存分に楽しんでます。

この夏に開催されている「山口きらら博」にワークショップ、ステージ出演等計10回(8/20現在)徐々に「ジャグリングやりたい予備軍」が増えてきました。

市民ジャグラーの集まる街、イベントを目指してガンバってます。これからもよろしくお願ひ申し上げます。

「山口」は今元気です。

[藤井一之 <rtxkf@mocha.ocn.ne.jp>]



ビデオ紹介

[Juggling]

制作: Strider Productions

総時間: 50分

言語: 英語

入手先と価格:

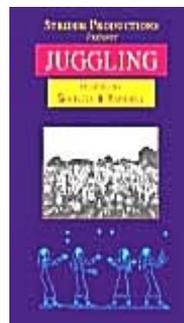
- ・Brian Dube, Inc <<http://www.dube.com/>>
\$29.95 (NTSC Version と指定のこと)
- ・ナラン八 <<http://www.naranja.co.jp/>>
5400 円

ジャグリングの魅力、楽しさを人に説明したいと思ったとき、あなたは何かから話しますか？

自分で練習する楽しさ、一流のジャグラーの技を見る楽しさ、大道芸の面白さ等、いろいろあって一言では語り尽くせないのではないのでしょうか？

ずばり "Juggling" と題したこのビデオは、ジャグリングの魅力をもさまざまな側面から捉える一方で、ジャグリングを1つの文化としても語ってくれます。

もともとはテレビ番組としての放映を前提に作られたようで、画質、音質、構成・編集は他のジャグリングのビデオよりずっと優れています。



エジプトのピラミッドの壁画に描かれたジャグリングの絵から始まり、近代にいたるまでのジャグリングの歴史を追った後、近現代ジャグリングの土台を築いた Enrico Rastelli(1927), Bobby May(1933)の貴重な映像へと続きます。

大昔のフィルムからの映像なので、白黒なのはもちろん、人物の表情も定かではなく、コマ数が少ないため動きもビョコビョコしたものになっていますが、演じている技はすごい一言。

Rastelli は6枚の皿をジャグリングしながら足でリングを回し、おまけに縄跳びをしていますし、Bobby May は計算し尽くされメリハリの利いたスタイリッシュなルーチンを見せてくれます。

1960年代の代表として紹介されるFrancis BrunnとLotti Brunn(1963)の、ボール・スピニングやリング・スピニング、バランシングとジャグリングを複雑に組み合わせたコンボ・トリックも、ジャグリングを技術的に極めた頂点の1つとして、ジャグリングの歴史を語る上では欠かせません。

でも、技術的に難しいことをするだけがジャグリングではありませんね。

コメディアン兼ジャグラーとして何十本もの映画に出たW.C.Fields(1934)はアメリカで一番知名度が高いジャグラーだと思われませんが、彼の演技は技よりも笑いをとることに重点を置いていました。

その流れを現代に引く例としてRobert Nelson(通称ButterflyMan)がステージの様子とともに紹介され、「観客との間の垣根を取り払って一体になること、それが自分のやりたいことだ。」と彼の芸人哲学を語ってくれます。

芸としてのジャグリングが一通り紹介された後で、主題はジャグリングの文化へと移っていきます。

このビデオの中では、現代ジャグリング文化の特徴として、何でもオープンに教えあい分け合う点が何度も強調されていました。

現代の大御所Dick FrancoはBobby Mayから惜しみ無くいろいろなことを教わった経験を語り、今度は自分の持っているものをAnthony Gattoへと伝えていきます。

Dick Francoとともにステージに立っているAnthony Gattoは当時わずか9歳！

しかし、その演技の完成度は並外れたものがあり、現在のAnthonyの超人的な実力は幼少の頃から培われたものなのだと納得しました。

IJA(International Jugglers Association)のフェスティバルの様子やDave Finniganによる子供達へのジャグリングの普及活動も紹介され、教えあい分け合う精神がジャグリング文化が発展するうえで重要な要素であることがよく分かります。

そして、世界の文化の中でのジャグリングへと話は移ります。

長い歴史と高度な技術を誇る中国雑技、伝統的に女性のほとんどがジャグリングをするトンガ王国が紹介されますが、7つの木の実をシャワーするトンガの小学校の先生やトンガのジャグリング・ゲームの様子など、他では見られない、興味深く貴重な映像が楽しめます。

話には聞いていましたが、私も実際の映像を見るのは初めてでした。

カメラは再びアメリカへ戻って、サンフランシスコの観光名所Pier39での大道芸コンテストの様子や大道芸が市当局から認められるまでの経緯、Pickle Family Circusという小サーカスを紹介し、文化としての大道芸やジャグリングの魅力を語ります。

さらに、ジャグラーの活躍の場として、バスケット・ボールのハーフタイム・ショーの大舞台やブロードウェイの劇場(The Flying Karamazov Brothers)も取り上げます。

そして最後を飾るのは、我々を含めジャグラーの誰もが知っている、「練習することの楽しさ」です。

Air JazzのメンバーであるPeter DavisonとKezia Tenenbaumのリラックスした練習風景や地域のジャグラー達の練習会の様子を通じて、ジャグリングをすることの純粋な楽しさ、そして教えあい分け合うことの素晴らしさが画面から伝わってきます。

広い芝生の公園でのジャグリング、本当に楽しくて気持ちよさそうです！

ここまでの要約で分かる通り、このビデオはドキュメンタリで、入門ビデオや技の紹介をするビデオではありません。

しかし、単なるインタビューや解説の部分は少なく、実際の映像がふんだんに盛り込まれており、見ていて退屈しないだけでなく、技や演技のヒントもあちこちで拾うことができます。

ただし、ビデオ中で取り上げられているのは、ほとんどがトス・ジャグリング(投げるジャグリング)であり、その他のジャグリングは断片的にしか出てきません。

1981年制作ということですがに映像の古さは否めませんが、伝説となっている名ジャグラーの映像を見られるだけでなく、現在活躍しているジャグラー達の若い頃の姿を知ることができるのもまた面白いと思います。

個人的にはDick FrancoやButterflyManの昔が見られて収穫でした。

今現在のジャグリング界を題材としたり、アメリカ中心ではなくてヨーロッパを中心に上げたりして、同様のドキュメンタリを作ったら、また違った味わいの番組ができるのではないのでしょうか？

もしそのようなビデオがあれば、是非見てみたいものです。

(文中敬称略、(19xx)は映像記録の撮影年)



レポート

【沢入サーカス学校開校】

NPO法人国際サーカス村協会のサーカス学校がいよいよ開校しました。
 とりあえずは先生1人生徒5人、場所は廃校となった小学校の体育館使用という、小さな一歩からのスタートです。
 先生のナジェルダさんは、スポーツアクロ体操での優勝経験者でもあり、ウクライナから単身で来日し、まずはサーカスに必要な身体作りを目標に授業が進められます。
 生徒さん達は何らかのパフォーマンス経験者ですが、それぞれの夢を抱き初心に返ってのスタートです。
 先生、生徒と共に学校のある勢多郡東村沢入に生活しながら、いわば24時間サーカス漬けの4年間になるわけですが、どんなアーティストに育つのでしょうか、楽しみです。
 開会式は多くの地元の方々も駆けつけてくれ、ウクライナのサーカス学校に留学中の三野さんのクラウンアクトや轟(二工)さんの雑技などのアトラクションも交え、和やかな雰囲気で行進していきました。
 開会式の後には、地元の方々の協力により出席者全員にカレーを召し上がっていただき、学校帰りに駆けつけてくれた子供達のために轟さんが再度パフォーマンスを披露し、子供達の喝采を浴びていました。

【開校式】

日時:9月1日(土)10時10分～11時20分
 場所:群馬県勢多郡東村沢入 旧沢入小学校体育館
 式次:

関口事務局長 挨拶
 西田村長 挨拶
 生徒紹介:國島友紀、國島智春、堀口晶子、福田寛弘、阪井武司(敬称略)
 ナジェルダ先生 挨拶
 田川助役 祝辞
 松島議員 祝辞
 岩崎京子先生(児童文学作家) 祝辞
 関係者紹介、祝電紹介
 アトラクション
 クラウンアクト(ヨッチャン)
 雑技(轟さん)
 ピアノ演奏(毛利さん)



サーカス学校



先生と生徒たち
(國島友紀、福田、ナジェルダ先生、阪井、國島智春とゆりなちゃん、堀口)

【安部 国際サーカス村協会 <<http://www.circus-mura.net/>>】

編集後記

かれこれ10年ほど前にジャグリングに本格的に興味を持ち始めた頃に、IJAの存在を知り、会員になると共にフェスティバルのビデオを購入し、テレビに映し出される映像の数々に度肝を抜かれ興奮したことを今でも良く覚えています。

特にチャンピオンシップでの驚異的なトリックの数々は新鮮で衝撃的でもありました。と同時にいつ頃このチャンピオンシップの映像に日本人が登場するのかなあ、と思ったりもしましたが、ついに今年の記録ビデオに見ることが出来るのですね。

松浦さん、お疲れさまでした、そしてありがとう。

日本人ジャグラーの皆さんにとっても、とても刺激的なニュースとなったことでしょう。

ジャグパルはWeb上でも見られます。(Webだと写真等はカラーです)

紙での郵送が不必要な方はご連絡ください。

WebSite: <<http://homepage1.nifty.com/abesan/>>

編集発行人:安部保範

住所:横浜市栄区公田町424-9 (〒247-0014)

E-mail: abesan@dream.com Nifty: QGB02014

WebSite見世物広場: <<http://plaza4.mbn.or.jp/chansuke/>>